
久遠の歌

マグロ頭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

久遠の歌

【Nコード】

N5807B

【作者名】

マグロ頭

【あらすじ】

夏芽の歌から、少しあとのある日。公園で日向ぼっこをしていた夏芽は大切な出会いを果たす。強さってなんだろう。強いならそれだけ弱いのだし。でも、独りだけでは辿り着けない強さ。集まっていたら辿り着けない強さ。どっちもあると思うんだ。

夏芽が駅前で歌い始めて、一年が過ぎたある日の事。厳しい冬の北風が、暖かな春の陽射しに移り変わり始めたその日。夏芽はとても大切な出会いを果たした。

午後一時半。昼食を食べに来ていた会社人たちも、元気に走り回る子どもたちもない静かな公園。夏芽は、大学の哲学の講義をさぼって、日向にあるベンチに座っていた。時折吹く北風にコートの襟を立てて身を震わせながらも、心地よい日向ぼっこを満喫している。

陽射しはこんなにも暖かいのに、こんなに寒い風が吹くなんて……不思議な季節。夏芽はセミロングの黒髪を撫でていく風を感じながら、そんな事を思った。

時々感じられる季節の移ろい。それに会おう度に、夏芽は何だか得した気分になる。どんな変化でも感じる事はとても嬉しい。例えその変化が自身の中であろうとも、外であろうとも。

夏芽は他にも季節の移ろいがないか、辺りを見回してみた。しかし、動かない限りは限度がある。

これと言った収穫を獲る事が出来なかった夏芽は、小さく溜め息を吐いて目を閉じた。何せ面白いものがないのだ、仕方なく眠りの世界へと落ちていく事にした。

久遠の歌

『あなたは強い心を持っているのですね。ガラスみたいに透き通っていて、とつても綺麗。……でも、強い心は弱いあなたの裏返しなのかもしれませんよ?』

声が聞こえた気がして、夏芽は目を覚ました。誰だろう？ ぼやける眼で辺りを見渡す。それらしい人はどこにもいなかった。と言うよりも、人ひとり見当たらなかったのだ。

不思議に思つて、でもまあそんな事もあるかと夏芽は納得した。どうせ空耳だろうと思つたのだ。そうしてそのまま声の事は忘れてしまった。

何もする事はなく、ただ眺めていた、優しく太陽の陽射しを反射する公園の地面。

何も変化のなかったその上を真つ黒な犬が横断し始めた。公園の西側、膨らんだ蕾を沢山つけ、ちらほらと咲き始めている大きな桜がある方からひよっこり現れたその犬は、人目を引く毛色のわりに、とても小さく、弱々しく歩いてきた。春の訪れを感じさせるこの公園の中で、たった一人だけ取り残された弱者の様だった。

夏芽にとつて、弱者とはすなわち立ち向かわない者を指す。例え強者に殴られたとしても、決して闘志を折る事なく、例え権力に押し潰されるはめになつたとしても、絶えず反発し続ける。そして何よりも、自分の道を信じ、壁は自ら乗り越え、別れていった他者の存在を考える事が出来る者こそを、真の意味での強者だと思つてゐるのだ。

嫌ならば、拒否すればいい。信じているのならば、信じ抜けばいい。過ちを犯したならば、二度としないようにしたらいい。それなのに自分を偽つて、妥協する。そんな生き方が夏芽は大っ嫌いだった。自分に負けてしまふ弱者なんて、いつまでも前を見る事は出来ないのだから。

黒い犬はひよこひよここと、不自然に飛び跳ねて歩いていた。その背中にはボウガンの矢が二本。よく見ると後ろ足を片方曲げたまま、ずっと地面につけていないでいる。きつと何処かで虐待を受けたのだらう。情けなく、憐れな姿だった。

嫌なものを見た。夏芽はそう感じた。あんな姿になつても、生きていかなばならない犬も、犬に虐待を加えた糞野郎も、その犬を見

てこんな事を考えてしまふ自分も。全部全部嫌なもの。なくしてしまいたいと願うのだけれど、必ず有る汚いもの。夏芽はこれらを忘れるために歌ってきた。

綺麗なものばかりだったら、絶対汚くはならない。幸せがみんなに平等に与えられて、争いも、後悔も、憎しみもなくなれば、きつと平穏になる。そうなれば、そう出来るのならば……。

だから夏芽は歌うのだ。自分だけ、自分一人だけが平穏を感じるために歌っている。平穏を感じるためにこの道を歩いている。そんな自分の歌を聞いて、誰かが拍手をくれるのならば、万々歳ではないか。夏芽はそう思うのだ。

でも、そんな思いも、ふとしたきっかけで簡単に揺さ振られてしまふ。現に今夏芽はとても不快になっていた。傷ついた犬を見て、暗い感情がしとしと溢れ出していたのだ。平穏のための心の栓は、とても歪で不安定に保たれているのだから。

そんな夏芽の不快感を引き起こす原因となった犬は、相も変わらず公園を歩いている。ゆつくりとした歩調で、一步一步、一心不乱に確かに歩いている。まるで目的地がある旅人のように。帰る場所を見い出した勇者のように。弱いはずの存在から、不思議とそんな印象を受けた夏芽だった。

真つ直ぐ公園を横断する犬。夏芽の丁度正面に来た時、犬は突然立ち止まり、夏芽の方を向いた。十数メートル先の黒い瞳が、真つ直ぐに射抜いてくる。夏芽はその視線に怖じ気付いた。弱く小さな存在の眼差しに、何故か堅くなななものを感じとったのだ。

「な、なに……?」

思わずそんな声を漏らしてしまう。それほどに犬の眼差しには何かが込められているのだ。真つ黒な眼差しに一体何が秘められているのか。夏芽には見当もつかない。

しばらく見つめあって、犬は夏芽の方へ歩み寄ってきた。ひよこひよこ、ひよこひよことおぼつかない足取り。夏芽に徐々に近付いてくる。

虐待したのは人なのに、私が怖くはないの？ どうして私に近付いてくるの？ どうしてそんなに真っ直ぐなの？

様々な疑問を浮かべつつも、夏芽はただじっと座っているしかなかった。立ち去る事も、立ち上がる事さえも、許されていなかった。一体誰に？ 神に？ この空気に？ 目の前の傷ついた犬に？ いや、もしかしたら夏芽自身になのかもかもしれない。

犬は数分かかって夏芽の足元に辿り着いた。辿り着いて、地面に座って、真っ直ぐ夏芽を見つめる。しっぽを振ってこびる事も、牙を向いて威嚇する事もなく、ただじっと、その黒い瞳で。何故か心配するような、とても優しい瞳で夏芽を見つめてくる。

「どうしたのよ」

夏芽は泣き出しそうになりながらそう聞いた。溢れ続けていた暗い感情は、いつの間にか夏芽を包み込んでいて、培っていた思いは沈んでしまっていた。悲しい訳ではない。悔しい訳でもない。では何故泣きそうになっているのか。暗い感情の水底、仄かに光る輝き。これは何？ これは……嬉しさ？ それとも、優しさ？ 夏芽は戸惑っていた。

「私に何をしろっていうの？」

小さな頭を撫でながらそんな事を聞いた。する事なんてすぐに分かるのに。した方がいい事なんて決まりきっているのに。どうしても尋ねずにはいらなかった。

だが、当然の事ながら、犬は何も答ええない。答ええないまま、目を細めてずっと撫でられている。時折、少し鼻を鳴らして、切なそうにする。切ない？ ……違う。悲しそうにしているのだ。

夏芽は自然と犬を抱き締めた。小さな体。壊れそうなほど細い体なのに、突き刺さった二本の矢。この街には、こんなに酷い事がまだまだ沢山あるのだ。世界には、もっと悲しい事がごろごろしているのだ。

そう分かった時、夏芽は躍動を感じた。体の中の深いところ。心と繋がるそこで、何かが生まれた瞬間だった。

「……待つて。今手当てしてあげるから」

夏芽はこの犬を治療しようとした。しなれば自分で自分を否定する事になる。それだけは嫌だった。でも、それだけじゃない。突き動かされるように動き始めた。

財布を見る。とてもじゃないが、動物病院に連れていける金額は入っていないかった。

「少しの間、ここで待つてね」

笑顔でそう言つて、夏芽はここから一番近くにある薬局の場所を思い出した。

私に、今の私に出来る精一杯の事。

夏芽は走り出した。

『手を伸ばせば何かに届くかもしれないよ』

そんな声を聞いた気がした。

息を切らして帰ってきた夏芽。黒い犬は行く前と全く同じ姿だった。でも、違う。座りながらしっぽを振っている。笑つていてくれる。夏芽は自然と笑顔になった。とても嬉しかった。

犬がしっぽを振ってくれたからじゃない。ただそこにいてくれた。待つていてくれたから……。その事がとても嬉しかったのだ。

「ちよつと痛いかもしれないけど我慢してね」

ベンチに座り、買ってきた物を置いた夏芽は、犬と向かい合つてそう告げると、背中に刺さった矢の一本目に手を伸ばした。

不格好に飛び出たそれを掴む。犬の体が俄かにこわばった。夏芽も緊張する。ゆっくりと、矢を引き抜き始める。傷口から血が滲み始めた。

「ちよつとの我慢だから……」

肉の感触が矢を通して掌に伝わってくる。反しが付いているのであるう、引き裂く振動がとても不気味だ。血が黒い毛を伝って地面に落ちた。赤い染みが一つ、二つと増えていく。

引いて、捻って、引いて。引き抜くためとはいえ、夏芽は矢で容赦なく犬の体を更に傷つけていた。それでも矢はなかなか抜けな

い。
でも夏芽は満たされていた。何故なのだろう。今、目の前にある状況、行っている現実。どちらも辛くて嫌な事なのに。なのに、例え自己満足だったとしても、優しくなれる。とても暖かい気持ちになれる。どうしてだろう。夏芽はそう思っていた。

音もなく、突然矢がとれた。同時に地面に大きな深紅の染みが出
来上がる。

しかし、今の夏芽にそんなものは写らない。そんな染みを見て何か感情を抱くよりも、いち速くもう一本の矢を抜く。こちらの方が断然すべき事だったから。

二本目も苦心して抜くと、夏芽は買ってきた消毒液を傷口に大量にかけ、包帯でぐるぐる巻きにした。

「よしっ。これでOK。……なんか情けなくなっちゃったね」

真っ黒な体に、真っ白な包帯。縦縞模様もここまで大雑把だと笑えてくる。犬は笑う夏芽を見て首を傾げたが、しっぽを振って元気よく吠えた。

「うわっ！ びっくりしたあ。脅かさないですよ、まったく……」

笑顔と笑い声。幸せはいつ、どこにあるかは分からない。でも、どんな時でも、どんな所にでも降ってくる可能性を秘めている。夏芽は清々しい幸福に包まれていた。

ずっと独りだと思っていた

周りには知らない人ばかり
切なくて、寂しくて
強くなることにした
強くなれば大丈夫
そんな気がしてたんだ

でも、僕は見つけたんだ
もっと悲しい世界の影
傷付いて、泣き疲れて
でも、生きている君を
僕に出来るなら
君の支えになれるなら……
自然と僕は手を伸ばしたんだ

あの出会いから二週間後がたった駅前。夏芽は変わらず、キーボードによる弾き語りをしている。太陽は沈み、濃紺に染まる空の下で夏芽の指は、音楽を奏でる。

いつもと同じスタイル。変わらない風景。ただいつもと違う事が少々あった。

まず第一に、夏芽の右下、寄り添うようにあの黒い犬が伏せていた。白い包帯はすっかり取れ、不自由だった後ろ足も、何とか獣医に見てもらい、破格の手術費を払って、完治した。今は気持ち良さそうに目を閉じて、夏芽の歌に聞き入っているみたいだ。

そして今日、夏芽は初めて新しい曲を歌っていた。前のようなしんみりと考えさせて光を見い出すような曲ではなく、明るく元気になれるような音色に乗せて大切な歌詞をつむいでいる。

毎日聞きに来ていた観客たちも、初めて聞きに来た観客たちも、新しい夏芽の歌を聞いて、笑顔になってくれていた。どこからか、手拍子も聞こえてきている。

君と二人、この道の向こう
ずっと一緒に、歩いていたい
誰かと共に過ごすのは
とても怖くて、難しいけど
君と一緒に、共に過ごせたら
きっと幸せ、そんな気がしたんだ

自分を守る強さを
誰かを助けるために
一人で向き合う壁も
誰かとなら簡単だから
共に生きる君と
ずっと一緒に
久遠の時を
生きていたい
そう、思ったんだ

歌い終わって夏芽はお辞儀をした。暖かい拍手が浴びせられる。
目を閉じていた犬も、夏芽の側に寄りかかり、まるで一緒に満面の
笑みを浮かべているようだった。

『ありがとう。その一言はお互いに胸の内にとまっておく事にする
よ。大切な君へ。大切な僕へ。この歌が届きますように……』

(後書き)

今回は詩に力入れました！頑張ったんです！……どうでしょうか？
(かなり心配だ) そうそう、私の短編、全てがどこかで繋がっているようにしたいと思います。まだ、主となる短編は考えてませんが、繋がりは構想完了できてるので、頑張ります。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5807b/>

久遠の歌

2008年11月7日08時23分発行